

絵画修復家の アトリエから

加賀優記子 絵画修復家

25

今朝は、珍しく早朝からひっきりなしに何か自衛隊のヘリが上空を飛んで行ったので、おかげですっかり目が覚めてしまい、何か事故でもあったのかと目をこすりつつテレビをつけました。

そうしたら、日本が北朝鮮を制してワールドカップ出場権を一番乗りで取れたこと、その選手が朝10時に空港に到着する、というニュースをやっていた。そうか、では、さっきのヘリはその飛行機の護衛の為だったのかなあ？ はたまた北朝鮮が悔し紛れにミサイルでも打って来るのを警戒していたのか？？と、昼もアトリエで引き続き考えていたところ、

今度はお昼の株式ニュースで、このワールドカップ参戦の経済効果は2500億円程度になる見込みだ、という。ひゃあ、

マルコス大統領の所持品だった絵もアトリエにやってきました。もしかしたらいつかホリエモンのもので来るとも知れないワ。

そういう訳で、今日も世界のお金持ちが手にしたり、手放したりして長い旅を続け、縁あってウチのアトリエで一休みしている数々の絵のお話です。(と、い

うより額縁のお話。)

……もうね、置く所が無いのです。今、約30畳の工房の中は、絢爛たる額縁で一杯。とりわけ一番真中でデンと陣取っているのは、先回の号でお話したプラチナで描かれた梅原龍三郎の作品に付いてた大きな額縁です。これは今まで見たことが無いくらいものすごい彫りが施してある、純金の額です。

画商さんには叱られちゃうかもしれないけど、はつきり言つて、いくらプラチナで描かれている作品と言つても、なんかよつとパパッとほしょつて描きすぎでない？と思つてしまうような絵柄だったんですが、どうしてどうして、この額

に入れて途端、「はー、やつぱりすごいよねー」と妙にありがたくなつてしま

う程、とにかくルーブルに居てすごい額ばかり見てきたはずのこの私にも、この額縁はど迫力の代物です。この額を見るだけで、この絵の所有者の財力を目の当たりにする気がします。(誰だったか知

つてるけど、それはヒ、ミ、ッ！)

最近まで、私は基本的には油絵の修復、と言う事にこだわつたので、額縁の修理はあまり受けてきませんでした。

これはルーブル時代に、チームのうち私を含む4人が絵画の修復を、あと2人は師匠がポーランド人だったので、(年配のポーランド人は学校でロシア語を履修していた)額縁の修理に腕の立つモスクワ美術館の額修復専門家をスカウトしてパリに連れてきてた事が関係していま

す。天井画を直している間は、高い可動式の足場を絵画修復班と額修判断用に2台を並べて、あつちとこつちでお互い向上を向いての苦しい作業をするわけですが、モスクワから来た彼らはまるでマジックの様に、ミクスチョン(金箔用のニス)

を塗った額の部分に毛の刷毛でピロロド台の上に小さく切つてある金箔をすくい、これを垂直に20センチ程上方に投げ

てはピシッと狙つた処に貼つてゆく。この離れ業をはじめてみた時は、な、何なんだ、この人達は！と、本当にビックリしました。

キラキラキラと5メートルくらい下のサロンに金箔の粉が落下してゆく、閉じられた空間でロシア語とポーランド語が反響する。(せつかくパリにいるのに、本意にも自分がポーランド語の方がドンドン上達してしまうのが当時の悩みだった)数年かけて私は彼等からおもしろ

いピロシキの作り方と、上手な金箔の貼り方と、しまいにパリのロシア正教会も一緒に修復したので、アイコンの直し方まできっちり教わつた。

しかし、油の修復と額の修復は別のものだ、とにかくこのロシア人たちにはかなわな

い、ということも、このとき痛感したために、私の頭の中ではなんとなく油彩画修復と額の修復との間に、線が引かれてしまつたのです。

しかし、今回のこの梅原の額は放つて置けない。何しろ、絵を生かしているのはこの額

なのだから。そういう事で、絵よりも断然難しく時間の掛かるこの額の修理を相手と二人で地味に頑張つてい

ます。そして、そのお隣には、笑つてしまう程、これまた超豪華な激しくキンピカなシャガールの額。絵は10号程度なのに額の太さは30センチ位の幅がある。なんだか田舎の仏壇みたいに仰々しいけど、だ

けど、この額もキットすごく高価なんだろうなあ。

こういう額を作つた人はきつと名前の知られた人かな。以前に、逗子で、千住博の額等を手掛けていられる井上滔山堂

さんを訪ねた事がありました。こうい

う日本の額縁作家の存在も情報として、気に掛けるようになってきました。それと

言うのも、今、ルノワールのかなり有名な作品を修復していて、この作品に見合うグレードの高い額を新たに誂えなくてはならないのです。オリジナルの額はもう付いていないのですが、現在ついて

いる額は絵に合っていない。それで、当時のオリジナル的な雰囲気や予測して上手く作り出さなくてはなりません。こ

ういう細かい指示や要望を受けてくれる、高級な手仕事をしている作家さんをもつと知らなくてはなりません。

うちのアトリエには、修復終了と共に、後で額も誂え直すから、と置いていかれ

た古い額も一杯あります。たいがいは数十万円したような立派な本金で彫りのあるものばかりです。ネームプレートには、

ユトリロとかシャガールとか、そんなのばつかりが書いてある。こんなのを道端の粗大ゴミに一気に出したら、なんだか怪しい感じ。あんまりもつたないから、いつか全部の額に模写でも描き入れてリ

ングをフェイクサロンにしちやおうかなあと考えたこともあつたけど、赤ちゃ

んのぬいぐるみか山ほど転がっているう

ちの家には全く合わないで、やつぱりやめました！

……少し話が飛びますが、この間少し安価なモルディングの額を作つてもらつたら、見本と東南アジアから輸入している今回の竿の出来とが大きく違つていて、絵を入れてみたら全然期待していた印象

と違つちやつてビックリした事がありました。以前に、フレームを扱う方が、ウチのは東欧で仕入れてくるのです、という話を聞いていましたから、そつちの方がやつぱり質はいいのかしら。

昔、東ドイツだった頃のサンズーシー宮殿内の修復工房に見学に行った事があつて、その時、一人の頑固そうな、長年この宮殿専属で額縁作りをしている人と出会いました。それはそれは昔からの伝

統通りの技法を守つた、静かで素敵な手つきで木地に石膏を塗つていた。それで、いつかポーランドやドレスデン、チェコなんかを訪れた時に、そういう店は無いかとずいぶん気にしていたことがあり

ました。

どうしても見つからなくて、潜在最後のクラコフで安ホテルのレセプションで夜遅く紅茶を淹れているおじいさんに

とりあえず英語で「額縁屋サンツェ知りませんか？」つて聞いたんだけど、おじいさんは全く英語が嫌いらしい。しょうがないので突然ポーランド語に切り替えて、も一回同じことを聞き、ついでにその今入れているお茶をあたしにも下さいよ(ダイムニエヘルバーテ)つて言

つたら驚いてカップを落とすようになって叫んだ。「なんだつて日本人がポーランド語をしやべるわけ？」だつて、しょうがないじゃない、やだけどしやべれちゃうんだもの。

ついでに、知つてる？日本語の「大丈夫」つてポーランド語で「あなたの唇下さい」(ダイジョウブ)、つまりキス・ミーなんだから！(今度どなたか額縁買い付けに行かれたら、是非綺麗な女性に言つて見て下さいね。)



モスクワ美術館からやってきた、額縁、アイコン修復の専門家のニコラと。パリのロシア正教会での仕事現場にて。

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は鶴沼で修復工房を主宰。